

我が国の「スポーツジャーナリズム」1998年

武藤 幸男

Sports Journalism in Japan (1998)

Yukio Mutou

This report was motivated by a personal desire to ascertain the status of, and the relationship between, sports and journalism in modern society. The research is based on materials on a personal computer and in libraries, and on several interviews with present and past sports journalists. More specifically, the 1984 special report of Journalism Review entitled The Sports Journalism is used as the basis from which the discussion proceeds. The main findings are that the definition of sports has changed, and that, influenced by multimedia, there have been change and progress in the field of journalism with regard to sports.

はじめに

この度、スポーツジャーナリズムについて自分なりの確認を得たいという動機で一応研究体制を整えるべくパソコン、図書館、元・現スポーツジャーナリストへの再三のインタビュー等、現代社会におけるスポーツとジャーナリズムの定位置と結びつきについてまとめてみる事とした。具体的には、1984年の「総合ジャーナリズム研究」の特集、「ザ・スポーツジャーナリズム」を根底において、論を進める事とした。その結果スポーツの定義の変遷、マルチメディア（平成4年をマルチメディア元年と云っている）という語句と内容によりジャーナリズムの幅に変化と進歩があった事を掴む事が出来ればと思った。

1 現在のスポーツをどの様に解釈するか、イギリスのマッキントッシュは、40年程前までイギリスでは、スポーツを娯楽や、遊びの対象と考えていたといい、しかし、その目的をオリンピックに置く様に主張した人物がこのように発言していた、また、文化としてはもちろんの事、我々人類にとってはますます重要な存在となる事を予測した。

1-1. スポーツの定義的なものにふれて見る

1-1-1. スポーツとは

現在スポーツについてはこれと言った定義は無いといえよう、と言うのも昨年の（H9.9.22）文部省への保健体育審議会の答申の中での「スポーツの意義」なるものが現在の「スポーツとは」にたいする答えといえよう。

1-1-2. スポーツの意義

スポーツは、人間の体を動かすと言う本源的な欲求に答えるとともに、爽快感、達成感、他者との連帯観等の精神的充足や楽しさ、喜びを与え、また、健康の保持増進、体力の向上のみならず、とりわけ青少年にとっては、スポーツが人間形成に多大な影響を与えるなど、心身の両面にわたる健全な発達に資するものである。

他面、スポーツは、人間の可能性の極限を追求する営みという意義を有しており、このような競技スポーツは、人々のスポーツへの関心を高め、生涯スポーツの振興に寄与するとともに、青少年をはじめ国民に夢や感動を与えるなど活力ある健全な社会の形成にも貢献するものである。

なお、スポーツの振興は、スポーツ産業の広がりと共に伴う雇用創出等の経済的効果や健康の保持増進による医療費の節減の効果等の側面もあると考えられる。

また、グローバル化している現代社会において、スポーツの振興は、世界共通の文化として、わが国はもとより世界のスポーツの発展に寄与すると共に、スポーツを通じた交流により、世界の人々との相互の理解や認識をいっそう深めるなど国際的な友好と親善のためにも有意義である。

学校教育の中での体育（身体教育）では、上記の内容からすると、その目的達成の為の手段としてスポーツを取り入れているが、このスポーツは一般に云われるスポーツとは、意味内容が少々違うが、それは後に分けて説明を加える。でないに現代教育における科学性が疑われてしまうことになる。現代スポーツの中では、二つにわたった考え方ではなく整理された、スポーツの概念で現在とはとらえているのであるが、そのスポーツの現在おかれている環境によって異なった位置や異なった解釈をされ、表現の自由の上ののって、色々な表情（規定、意義、定義等）をみせているかの様に見える。本来は同じ定義の上になつて、実行されたり、挙行されたり、実施されたり、教育の一部として展開されたりで、多岐にわたる位置づけを結果としてもたらされているスポーツということが無ければならないと思う。

また、見るスポーツ、やるスポーツなどの語句が生まれてきていて、その解釈も内容も全くマスコミに操られている為の分離でもなければ統合でもなく、ただその場の状態をさしているにすぎないので本質的には、そんな単純に2つに分けた形での動きは、表現上のことであり、ストレスの解消や雰囲気互いに求めあっているにすぎない、これもバブルという経済の成長が生み出したものであり、ある意味では、全く流行にすぎず本来の定着は、やるものが見る、見たものがやるのがスポーツであり、そこに現代スポーツの真の理解が出来る個々が生まれてくると思われる。

これらは、スポーツには、バイブルがないともいえ、その発生から、言語学的に娯楽、運ぶの世界といってもそれ自体がおかしいとも思える。sportの語彙について考えるに、現在迄、同じ解釈が言語学的になされているが、人間科学的・スポーツ科学的に考えてみると他の言語がsportに変わるものがあっても不思議はないと思われる。それは、スポーツ科学の中での心理学的、社会学的、生理学的な学術的な科学考証を考えてみると上記の様な説が生まれてくる。また、スポーツ史として、報ぜられるべきものとそうでないもの、区別からしても、そもそもその言語になったものからの成立であって、どこでどの様なは、現在の説に対して異論を唱えたい。しかし、この辺の所は今回は割愛して現代スポーツという一般論をもとに、ザ・スポーツジャーナリズムの84年版（新聞ジャーナリズム）との相関を中心に論じてみる。

1-2. スポーツとは何ぞや

<スポーツ>という言葉は、広義には、楽しみや健康を求めて自発的に行われる運動をいい、狭義には、競争として行われる運動を意味すると、スポーツ辞典に書かれているが、辞典たるものがこのていたらくというよりない。学校体育の中のスポーツであればこんなまとめ方でよいのかもしれないが、過去の実績、良い意味でも、悪い意味でもかち合ったらこんなまとめ方になるわけがないが、無難なまとめ方であると云えるのではないか。しかし、過去、現在のスポーツ歴史学者の特定の人間を、又、それしか知らない範囲での論でなく見てみると、スポーツはやはり、勝つことにあり究極の目的は、オリンピックであるとし、その中に楽しさや、ルール、そして、一つの流れを持っているものがスポーツであるとしたら現代スポーツの中のスポーツの定義とはなりはしないか、と云いたいところだが、平成7年のスポーツの考え方は最初にかかげた健康という語句がその説明の中に入って来ている傾向にあることが統計上（体育系）の結果として示されている。（体育学研究）しかし、実際にスポーツをやった（少なくとも全国大会に出場）人間にとって、その目的や結果が健康の為であったという様な意識でスポーツをやっていた者は非常に少ないし、現に多くの人間がスポーツ障害を抱えているのが現状であり、否定的にならざるを得ないのが筆者である。

上記の様な事が他の部分でふれているのであれば問題はないと思うが、片手落ちと云わざるを得ないのではないか。現在取り組んでいる課題に対しても非常にインパクトのない展開になる恐れがあると同時に、一般の人々は、又、スポーツを或る程度研究した人々にとっても納得のいかないまとめであると思う。

そこで、筆者なりの時代区分と、スポーツ区分を行った上で最終的な結論を出してみる試みを考えてみた。出来るだけ、自己流でなく一般化されたものの集約の中での進め方をし現代スポーツの様相を示してみたい。観点を変えて考える。

1-3. スポーツの分類

学校体育としてのスポーツ
競技スポーツ
健康スポーツ
社会スポーツ（幼児・老人）
障害者スポーツ
プロスポーツ

上記の様な分け方で、共通部分もあるが、これらを総体してスポーツとするならばどうやらまとまりそうである。レクリエーションスポーツなどは別分類と考えられる。その様に取り扱わないとスポーツの基盤となるカテゴリーにはならない。

次に、時代区分であるが、この時代区分はスポーツが学問でなく文化であるとして区分していくために、ここで又、定義への進め方に色々なふらつきが出て来る筈である。一応形式的な、形而上学的な流れで押さえていきたい。

そもそもスポーツの多くは、日本生まれではない為に訳意や見た目・状況で理解したり判断し

たり、そのままの鵜呑み理解も多くあったであろう。

又、多角的多様な側面を持っている為にいろいろな解釈や表現がなされると同時に時代の流れも影響してくる傾向としては、アマチュアスポーツの影が薄くなったこの影響は大きい

D・Jブーアスティンの説からするとスポーツは、
根本的に浜の真砂と・・・であるからしてスポーツも尽きる事はなく人類ある限り続くであろうということとなる。

1-4. 見方を変えたスポーツ

また、スポーツという説明本が何冊もあることがおかしいそして内容総論が一部一致の結論なし、そこで上記を含め、これからの論理を含めてその目安として、国際スポーツ・体育評議会は、1968年に<スポーツ宣言>を提議し、スポーツとは<プレイの性格を持ち、自己または他人との競争、あるいは自然の障害との対決を含む運動>であると提議した。(この中にルールの事がうたわれていないのがおかしい)。

1-5. スポーツの時代区分

時代区分

生活即スポーツ
スポーツの発生

未開時代
有史以前

古代社会のスポーツ
古代ギリシャのスポーツ
古代オリンピック
古代ローマのスポーツ

中世社会のスポーツ
王侯貴族、騎士、都市民のスポーツ
ロウカル色の強いスポーツ

近代社会のスポーツ
勝敗・記録第一主義のスポーツ
スポーツの国際化・組織化
<セントラルスポーツ>
<マージナルスポーツ>

ここまではスポーツの画一的、定義なし。

現代社会のスポーツ
生涯スポーツまで。

上記のスポーツとは、これからのジャーナリズムとの関係相関が少ない。それは多角的な視野からスポーツを理解しその見方もまちまちである。それも定義がないからといえよう。

2 ジャーナリズム

新聞・雑誌・ラジオ・テレビなど、活字や電波を媒体とする報道その他の伝達活動、及びその経営体

時事的な事実や問題の報道・論評の社会的伝達活動。これまでジャーナリズムとはニュースを収集し、選択し、解説し、そして継続的・定期的に伝達する行為、というのが一般的に承認されてきた定義であった。

ジャーナリズムは、無数に生じた出来事のなから、民衆の次の行動決定のために必要な事実をピック・アップして、できるだけ早く、できるだけ広く正確に伝えることが要求される。また民衆が自らの置かれている状況を十分かつ的確に認識できる条件が、国民全員に与えられている必要がある。

ジャーナリズムとは、民衆のために、「今伝えねばならないこと、今言わねばならないことを、今、一刻も早く広めること」ということができる。また、忘れてはならないのは大前提である「文化を高める」役割を忘れてはならないと付け加えた。塩田（元ベースボールマガジン社）

しかしながら、媒体として考えられる色々なメディアで、たとえば新聞などについてもコマーシャルベースに足を引かれ上記のような使命を果たすと言うだけではない様相で、特に、娯楽機能は読者を引きつけるためのものである為であろうが、新聞は、報道と評論を中心に編集されているように思える。部分的ではあるが、テレビジャーナリズムにはこうゆう様な姿勢でなくインフォテインメント（Information+entertainment）を無視することはできない。（とはいうものの邑瀬の言うようにテレビは、瞬間映像であるということでジャーナリズムの媒体としては考えられないと唱えている。すなわち、瞬間メディアであるという事に必要な検証、吟味、反復が不可能に近いという事である。そして、文化を育てるに最も必要な「言葉」が必要なメディアが、果たしてジャーナリズムたり得るか、私は、はなはだ疑問を持つのです。この記事は『アウロス』（H 8.4掲載）でいうところのジャーナリズムは、今やマスコミュニケーションと同義語ともいえる様相を呈している。

一方、平成4年を元年とするマルチメディアやインターネットとの関わりも問題になるであろう。

3 スポーツジャーナリズムとは

スポーツに関する情報、意見などの大衆伝達活動を言う。新聞、雑誌、放送、映画などを媒介とする〈ジャーナリズム〉の一分野と理解されるが、広義にはスポーツに関する大衆伝達活動を指す。

1984年「ザ・スポーツ・ジャーナリズム」という特集が「総合ジャーナリズム研究」でとりあげられた。

この扉の部分に

※見るスポーツ、するスポーツを問わず、マスコミとスポーツとの関係はますます密になってきた。

※日曜日のテレビからスポーツ番組を取り去れば、何が残る？ ナイター野球はテレビの物だ。

※通勤途上にスポーツ新聞、ゴルフ好きにはゴルフ週刊誌が待っている。キヨスク、書店はスポーツ一色。

※生活のあらゆる場面にスポーツが入り込んでいる。スポーツ産業とマスメディアの関係も実に深い。

※ロス五輪はコマーシャル五輪。いったい何を見せられる？ スポーツ・ジャーナリズムの1984年を斬ってみた。

※そして次のような小論が5編載っている。

コマーシャルリズムとテレビが五輪を変えた 水田（元NHK）

- ・みるスポーツ、するスポーツを問わず
- ・日曜日のテレビからスポーツ番組を取り去れば何が残るのか。
- ・通勤途上にスポーツ新聞、ゴルフ好きにはゴルフ週刊誌
- ・生活のあらゆる場面にスポーツが入り込んでいる。
- ・ロス五輪はコマーシャル五輪。一体何を見せられる？
- ・スポーツジャーナリズムの1984年を切ってみた
- ・コマーシャルリズムとテレビが“五輪”を変えたようなあり方をしている。

上記のことがアマチュアスポーツ大会にも見られようになった。

- ・オリンピック憲章から「アマチュア」の文字が消えた
- ・サラエボの星が期待した成績を上げられなかったのはマスコミのせいとは？

これらについては、当時の状況が教科書のように著していると活字を追うことができた。その通りに、現在も進んでいるという事で素晴らしい記事と思える。

ただ、アマスポーツについての考え方を置き去りにしないでの配慮をして欲しかった。

スポーツ番組の問題は報道か娯楽かにある 岸田（前文教大）

- ・テレビ主導のスポーツは、アマチュアスポーツにも影響を及ぼしている
- ・オリンピックの放送権料は上がるばかりでその結果、テレビ向きの種目が現れた。
- ・衛星中継の貢献
- ・コマーシャルメッセージが送れるオリンピック

- ・スポーツ番組の問題は報道か娯楽かにある
- ・野球はドラマかそうでないか
- ・野球＝報道から、野球＝娯楽であれば、民放のスポーツ放送はジャーナリズムからエンターテインメントへ転換の一步を踏み出すことになる。
- ・高校野球に微妙なプレイの場合スロウビデオでの解説はしない。審判は絶対
- ・スポーツ番組は報道番組でもあれば娯楽番組でもあり、教育番組でもあれば教養番組でもある。どれにも変化可能な怪人二十面相となると、やはりジャーナリズムかエンターテインメントかとなる。
- ・見るスポーツとやるスポーツ
スポーツ情報番組の登場
- ・野球はドラマではない。

この記事は、野球はドラマかそうでないのか、本人も最終的には否定しているが、筆者としてもはじめからドラマとは思えない。その理由は、筋書きがある様でないのと、やはりドラマの対象になる様なスポーツはそのようなしろものではなく、マスコミの強さでしかない。

又、スポーツはエンターテインメントでもない別の世界のもので結果から求めればドキュメントと云えるかもしれない。

スポーツ業界紙が応えるべき役割はこれだ 坂本（日本スポーツ工業新聞）

- ・スポーツ業界紙が答えるべき役割はこれだ
- ・スポーツとは、スポーツ本来のスピード、記録、闘志、競争などから、健康、若さ、清潔、それにルールなどを含めてクリーンなイメージを与える。その頂点にあるのがオリンピックである。
- ・スポーツ用具の技術開発はスピード、記録を飛躍的に向上させた。
- ・スポーツ産業の市場規模
- ・スポーツ業界専門紙とその実状。
- ・業界専門紙・誌の生き残り戦
- ・スポーツ業界専門マスコミとして何をなすべきか？
 - ①世界の情報を網羅する
 - ②海外の業界専門紙との提携
 - ③専門スタッフのようと部門の設置
 - ④英文版の発行
- ・スポーツはあらゆる産業のチャンピオンである。
進取的な意見が多いのと、ビジョンと抱負がしっかりして業界誌としての現況がつかめた。

総合レジャー紙志向のスポーツ新聞に転機が来た 大木（評論家）

- ・総合レジャー紙志向のスポーツ新聞に転期が来た
- ・スポーツ紙発行部数の推移
- ・スポーツ紙の売れ行き実体
- ・スポーツ紙の系列大手7社
- ・宅配市場と即売市場
- ・総合レジャーペーパーの躍進

- ・サンケイスポーツ新聞、躍進の背景は休刊日発行の影響
- ・曲がり角にさしかかったスポーツ紙
- ・総合か専門か、これからのスポーツ紙

スポーツ雑誌は娯楽の消費物化している 小椋（天理大）

- ・スポーツ雑誌は娯楽の消費物化している
- ・間接的スポーツ関与者について
- ・スポーツ参加者、スポーツ生産者、スポーツ消費者から構成される。
- ・これらのことがスポーツマンの自我やスポーツ道徳の発展にどの様に影響しているか
- ・見栄優先のスポーツの誕生
- ・情緒主義と社会学的視点の欠如
- ・感覚的、視覚的、流行的傾向
- ・現在はどうか

教育的働きかけと理念を持つての要望は、教育者らしい考え方であると思う。

まとめ

なれば1998年のスポーツジャーナリズムは、15年前とどのように違ってきたか、退歩なのか進歩なのか？

スポーツジャーナリズムは、或る意味では、特殊な領域ともいえると言うのも、ジャーナリズムの定義からすると、総てを満足させるという領域と断定できない面を、スポーツは持っているといえるからである。

その前に、自分の気持ちとして、はじめにも書いたように確認であったのであるが、その裏には、スポーツジャーナリストはスポーツの専門家であると同時にスポーツに対しての知識と体験が絶対に必要であると信じていたしその気持ちは今も変わらない。しかし専門家であれば誰でも資格があるのかという点必ずしもそうでは無いという事が解った。それは、『自分の知識でなく、「直接選手に聞いたものを報道する。」を伝えるべき』と塩田が実際面ではそうしたと言うことを聞きなるほどと思った。

また、その後の調べで他のことも色々掴むことが出来た。それらは、前述もしてあるが、インターネット、マルチメディア、ビジュアル化等々1984年以降の動きは大変なものであったわけで次に掲示するのは1996年4月号新聞研究からの抽出。

1996年4月の新聞研究に「拡大するスポーツ面」として、次のような記事が載っていた。(項目)

- ・より深く人間ドラマを提供するために
- ・国際化・デジタル化で増す通信社の役割
スポーツ興行団体とメディアの距離を注視して
- ・スポーツ秋田の県民ニーズに応える
今なぜスポーツ専門誌か
- ・地元紙の使命を果たす

評価高まる第2セクション「上毛スポーツ」

- ・新聞ならではの手法を模索して
多様化の中の運動部デスク
- ・見出しが命…スポーツ面整理記者考
- ・コラム…幅広い魅力を伝える窓
- ・まずゲーム評そのものを深めて欲しい。
- ・スポーツ面に望む物

[取材の線から]

- <Jリーグ>世界の一流に近づく為に
- <水泳>試される記者の良識
- <バレーボール>思惑通りで無かった衣替え
- <マラソン>五輪代表決定から見えるもの
- <スピードスケート>選手と同じ百分の一秒勝負
- <大相撲>スポーツと伝統文化の間で
- <プロ野球>自分のフィルターを磨く
- <ラグビー>魅力ある素材 神戸精鋼を追う
- <ボクシング>冷静に分析する目が必要
- <経済紙の工夫>ビジネスとしてのスポーツに注目

史的考察様な綴りになったが、上記の項目は今日のジャーナリズムの領域やその対象を良く捉えていると同時に1984年の時からの変化、進歩が現れている。しかし、これは1996年なりのもので、まだ取り上げられていない面がいくつかある様に思える。(収集した資料が十分に生かせなかった) スポーツ紙の低迷やこの時期は経済的には下り坂で1984年の頃は上り坂といえよう。スポーツは経済傾向には大きく左右され景気が悪くなると活発でなくなる。これは欧米ともにその過去に残しているし、日本でもそうであった。となるとジャーナリズム活動も停滞せざるを得なくなるし、見るスポーツの対象となった団塊は消滅していくであろう。いづれにせよスポーツの流行も過渡期に来ているようだ。野球とサッカー、大相撲と、又、プロ化への歯止め、用具の問題、ドーピング問題、こんなことを書いていられる日本人は幸せそのもので、スポーツジャーナリズムも商業ベースに揺さぶられ、本来の目的を果たせないどころか、マスコミとグルになって、選手をだめにし、スポーツのイメージを悪くしている様に思えてならない。これらはインタビュー等で知り得たことである。今回の内容は、ほとんどが問題提起で終わってしまい、もっとつこんだ分析や結論をもっと出せる様にしたかったが、この程度に留めておきたい。

後記

この度のレポートの作成にあたり全面的にご協力を頂いた、塩田、八代(文教大学図書館)両氏には、心からお礼申し上げて筆をおきたいと思います。

参考文献

- 原 寿緒 ジャーナリズムの思想 岩波新書 1997
中村敏雄 スポーツメディアの見方考え方 創文企画 1995
松本伸雄訳 ジャーナリストの倫理 文庫クセジュ 1997
田村紀雄共著 ジャーナリズムを学ぶ人のために 世界思想社 1993
片岡暁夫訳 スポーツとはなにか 不昧堂 1985
総合ジャーナリズム研究 No.134.147.21巻3号-1984東京社
「文芸春秋」にみるスポーツ昭和史 第1巻 文芸春秋 1988
日本体育学会 体育学研究 第42巻 第3号 第5号 1998
新聞研究 1996、4月号 1989、8月号 1988、8月号
沢木耕太郎 オリンピア 集英社 1998